

イエス・キリストの誕生

マタイ 1章 18-24節

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎（たい）の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れた。

説教

クリスマス直前の主日は毎年イエスの誕生に直接関係する福音箇所が読まれます。今年はマタイ福音書で、幼子（おさなご）の誕生がヨセフに告げられる場面です。福音書はまず「イエス・キリストの系図」（1章 1-17節）ではじまりアブラハムからヨセフまでを記します。16節には「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった」とヨセフとイエスの間に「血のつながり」がないことを明記します。

18節でマリアのことを母と呼びますが、ヨセフのことは父とも夫と呼ばず

婚約していたヨセフといます。マリアがイエスをみごもった次第はルカ福音書に詳しく、マタイ福音書はヨセフを主人公にしてイエス・キリストの誕生のようすを知らせます。

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。（1:18）

当時のイスラエル社会は早婚でした。結婚適齢期は男が16から18歳、女性は12から14歳ぐらいだったと注解書では説明されます。マリアは14、15歳でイエスを産んだという伝承もあります。（注1）現代社会の常識からするとずいぶんと若いうちにと感じますが、当時の早婚イスラエル社会ではごくふつうでした。

ヨセフがどのような経緯でマリアの妊娠を知ったのかはテキストからではわかりません。マリアがヨセフに告げたのか、それともヨセフが察したのか、それらとは別に世間のうわさで知ることになったのか。ヨセフは苦しみ悩み、考えに考えてマリアと縁を切る、つまり婚約はしたけれど結婚しないと結論しました。

夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。（1:19）

このヨセフの決心についてはふたつの解釈があります。1つはユダヤ社会の掟・モーセ律法にもとづいて妊娠したマリアとは結婚しない（姦淫の疑いから）と結論した。2つめはヨセフは聖霊によって妊娠したことを理解した、つまりこの妊娠には神の介入があるということに気づき、身を引こうと決心した。つまりヨセフは神を畏れ敬って、恐れ多くて、マリアとは縁を切る決心をしたとする解釈です。

このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」(1:20-21)

見方を広げてみるとヨセフはイエスに始めて出会った人です。誰もみたことない、まだマリアの胎内にいるイエスを知った人です。インマヌエル(=我々と共におられる神)に出会った男です。しかし、ヨセフからすれば「なんでオレなの?」という気持ちがあるでしょう。せっかくマリアと結婚することが決まっっていて、これから二人でささやかな家庭を築いていこうと願っているだけなのに、掟に従って離縁することもできる。よりによってメシアが宿るなんて。ほかの奴ではいけないのか。どうしてオレなんだ?

それはヨセフがダビデの子孫、ダビデの子というのが福音書の回答、天使のお告げです。預言によってそれは決まっているのだということです。マリアにいたってはそんな理屈もありません。ルカ福音によると天使ガブリエルがただ、おめでとうとマリアに告げるだけです。そしてマリアはとまどい、そののち受け入れます。

「われは主の婢女(はしため)なり。汝の言(ことば)のごとく、我に成れかし」(ルカ 1:38 文語訳)

ヨセフにおきたこと、マリアにおきたこと、これは根っこを考えてみれば私たちだって同じです。

一人ひとりが今ここにいる、という事実はどんな理屈をつけようが出てきません。いくらいままでの人間関係や社会的功績、その他いろいろを積み重ねても、人が人としてここにいる、という事実はでてきません。ただここにいるからいる、それだけ、人の存在にはそういうところが必ずあります。

そして、人が人であるということ、人として生きるように定められていることも、これも自分でなったわけではありません。ですから人が人として生きるように、この世界に置かれているということ、これは単純で条件はない、何も理由がない。いくらコレコレのことを積み重ねてオレは生きている、悪いことはしていないとか、こんな私なんて生まれるはずじゃなかったとか、オレみたいなものが生きていてもしょろがないとか、私が死ぬなんて不公平だ、などとは全然別のことです。人が人として存在するということは、単純に、人として存在する。あたりまえですが、自分が自分で考えて生まれて来た人はいません。

いるからいる、ということは、これはどうすることもできない。来ている事実、人として生きるように、与えられた状況の中で、その形をなしている。そういうかたちでお前も生きる、これを受け入れるしかほかはありません。そういう意味でダビデの子ヨセフの大変な状況というのは私たちが置かれている状況と根本的には違いはない。人間の根本状況というものはいつでも恐れおののかなくてはならないのです。

ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ（た）。（1:24）

ヨセフの戦慄、驚き、また恐れるなということばをありがたく聞いた状況、命令を受け入れたヨセフというのは私たちと決して無縁の人ではありません。全然別の人ですが、ただの無縁の人ではない。ヨセフそしてマリアが受け入れたイエス受胎、そのときの苦しみ・そのときの嘆き・そのときの決意というものが分からなければ、わたしたちは本当にいま、ここで生きるということができない、そういうものだとなんか思うのです。

きょうの福音を、神がみ子によって与えてくださった恵みと希望を私たち一人ひとりが自分自身のこととして聞くのでなければ、それは美しいおとぎ話、

あるいは不思議な昔話の一節に過ぎないものになってしまいます。実際、教会の内と外を問わず、降誕の物語はそのようなもの、私たちの救いとは何の関係もないものとして人々のかたわら流れ過ぎていきます。

今日の集会祈願をふたたび祈り、むすびとします。

ともにいてくださる神よ、あなたはひとり子イエスを、世の救い主として遣わしてくださいました。私たちが幼子イエスのうちに、愛と希望の光を見出すことができますように。アーメン

注1) 外典ヤコブ原福音書（副題は、いとも聖なる、神の母にして永遠の処女なるマリアの誕生の物語）の中に、いづれイエス様の御母となられるマリアは、14歳にヨセフと婚約したとあります。